

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

宮本真二（滋賀県立琵琶湖博物館研究部環境史研究領域）

「間接的な方法からみた土地開発史—アジア・モンスーン地域における
民族移動と土地開発—」

Shinji MIYAMOTO (Lake Biwa Museum) "The Reconstruction of
Agricultural Land Development Process along the Brahmaputra
River"

I. 民族移動と土地開発

ヒマラヤ・チベット山塊を源にもつブラマプトラ川（ジャムナ川）流域における土地開発過程は、複雑な民族移動と密接にかかわってきたことが指摘されている（安藤，2007；宮本ほか，2009）。これらの民族移動は、文献記録や民俗調査などによって明らかにされてきたが、直接的な物的証拠としての考古遺物や遺構をもとにした研究はほとんど行われていない。

このように、直接的な物的証拠としての考古学的研究の進展が望めない中、土地の開発過程（人為的環境改変）は、ヒマラヤの高地においては、広範に分布する埋没土壌・埋没腐植土層の形成環境と密接な関係があることが指摘されてきた（長岡，1990；岩田，1994，岩田・宮本，1996；Iwata et al., 1996；宮本，1998；宮本・岩田，2000）。

いっぽう、同じブラマプトラ川流域の低地の国土の9割がベンガル・デルタと呼ばれる世界有数の低平な地形に立地しているバングラデシュ（安藤，2000）では、定住化への過程の解明を試みた研究は存在しない。具体的には、ベンガル・デルタでは19世紀の段階でデルタのほぼ全域で定住地が分布していた（河合・安藤，1990）と指摘されているが、それ以前の土地開発過程は不明であった。

このように、高所から低所にわたるブラマプトラ川流域において、民族移動にともなう土地開発過程の検討は行われてこなかったと言える（宮本ほか，2009）。

このような研究史をふまえ、本研究では、ブラマプトラ川流域の土地開発の地域的相違を明らかにするため、ここ数年外国人の入域が認められ始めた①アッサム・ヒマラヤ地域（高所）を対象に、土地開発の指標としての埋没腐植土

層や、埋没した木炭片の形成時期について検討する。つづいて、低所では、バングラデシュ中央部（低所）を対象に、②集落の形成時期とその形成過程の解明の検討を行った。

II. ブラマプトラ川流域の高地と低地の土地開発

現地点での結論は下記の通りである。

1) 高地の土地開発

まず、①アッサム・ヒマラヤ地域でもシッキム・ヒマラヤ地域（ネパール・ヒマラヤ）同様に人為的な火入れを伴う土地開発によって、広域に埋没腐植土層や炭化木片が確認された。つづいて、②アッサム・ヒマラヤ地域では、約 2000 年前移行に土地開発が始まり、約 1000 年から 340 年前ごろの間に集中的な土地開発が行われた、最後に、③アパタニ族が居住するアパタニ谷では、常畑を経ないで焼畑から水田へと移行した。

2) 低地の土地開発

ジャムナ川中流域では、①約 12～11 千年前に形成された洪水氾濫堆積物（自然堤防状の微高地）を利用するかたちで、それ以降に、生産域と居住域の開発が行われた。その後も②幾度かの洪水に見舞われながらも、盛土の主体部の維持管理はマティ・カタによって、恒常的に実施されてきた。さらに、少なくとも③約 1.3 千年前までには当該地域において、生産域としての水田開発に連動する形で近隣地域に屋敷地が形成されたものと推定した。

今後は、調査地点の増加による実体解明とともに、民族移動の史実との整合性の検討が求められよう。

また、上記の事例研究の過程において、異分野がもつ方法論を共有し、融合へと展開してゆく過程についても議論した。